えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第118号
令和3年
(2021)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集　「江戸時代　宮廷の正月行事」……1～2
見学会
「再訪　広重『名所江戸百景』周辺探訪－その1」…3
えど友広小路……4～5
会員からの投稿「古文書初学者のつぶやき」／サークルだより／翻刻だより／友の会めも
新年祝辞　江戸博藤森館長・友の会林会長 ……5
友の会セミナー「立花宗茂―その迷いなき生涯」……6
友の会セミナー「廃仏毀釈とは何だったのか」……7
見学会「門前仲町から茅場町まで」……8
えど東京一景(25)　―二重橋― ……9
江戸博クリップ「染付便器とトイレの歴史」……9
江戸名所図会を歩く…㊷［東叡山寛永寺］(前) ……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

新春特集

江戸時代　宮廷の正月行事

どんなに時代が変わっても、お正月だけは、誰もが改まった気持ちになるのは不思議です。宮廷でも、１年の始まりである正月行事は、特に重要とされていました。平安時代から行われているものもありますが、中断したり復活したりしながら、続けられました。江戸時代に行われた宮廷の正月行事の中には、民間の行事に影響を与えたものも多々見受けられます。それらを含めて江戸時代の宮廷の正月行事を見てみようと思います。

『当時年中行事』

お正月に限らず江戸時代を通じて行われた宮廷行事は、第108代後水尾(ごみずのお)天皇が正保から慶安(1644～52)ごろにかけて編纂した『当時年中行事』によるものが多いようです。元々第110代後光明天皇(1643～54在位)に伝えるためでしたが、幕末までほぼ踏襲されました。これに基づき行われた主な正月行事のうち、民間へも影響を与えたものを加えながら見ていきましょう。

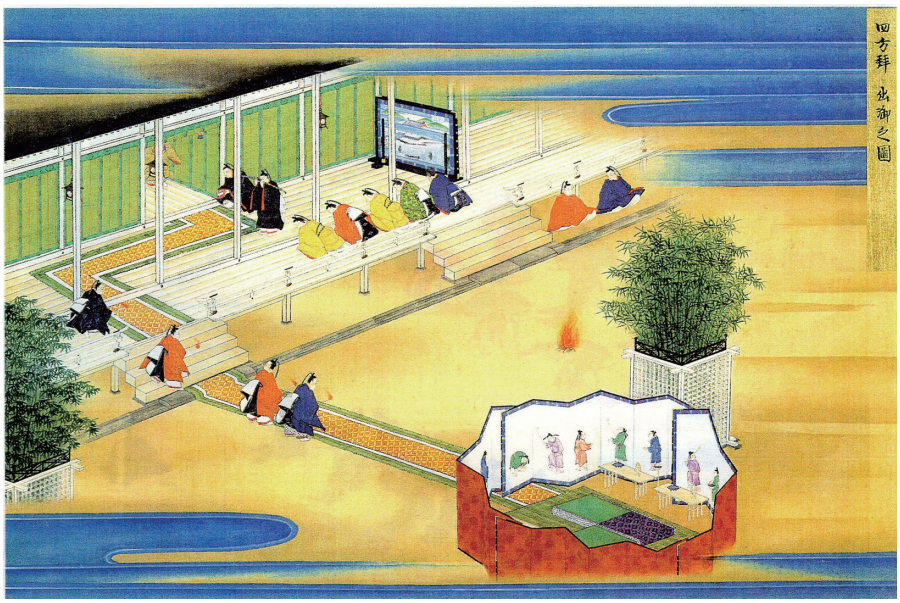
三が日に行われたこと

宮中の正月行事は、「四方拝」で始まります。1月1日寅の刻(午前4時ごろ)に天皇が清涼殿の東庭で、天地および東西南北(四方)の神々と先祖代々が眠る山陵を遙拝することです。災いを祓い、国の安全を祈る気持ちが込められている儀式です。これが民間に伝わり初詣の風習へとつながります。

四方拝に続いて行われるのは「朝賀(朝拝)」の儀式です。辰の刻(午前8時ごろ)に天皇が紫宸殿(平安時代は大極殿)で群臣からの賀(祝福)を受ける行事です。昭和23年(1948)1月2日から行われるようになった一般参賀(国民参賀)は、形を変えた朝賀の儀式といえるでしょう。

元日の午後に行われるのが「元日節会(がんじつのせちえ)」です。「節会」とは、天皇が主催して群臣に振舞う宴会のことです。元日には天皇が紫宸殿(平安時代は豊楽院(ぶらくいん))に出かけて行われました。

江戸時代の年始回りには、扇箱に入れた扇を持参するのが習わしでした。受け取った家では箱のまま玄関へ井桁に積み重ね、来客の多さを競っていました。ですから来客の少ない家では、自分で扇箱を買って積み上げたりしました。そんな扇箱の



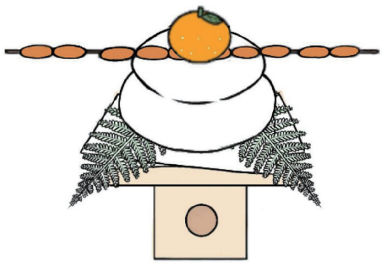
▲四方拝（『公事録附図』樋口守保のうち恒例公事之図　宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

返礼に、主人が酒を振る舞うのが習わしでした。これなど「元日節会」の略式かも知れません。なお、現在の年始回りは訪れた証拠に名刺を配ることが多く、先方からの返礼はめったにありません。

元日から３日にかけて行われるのが「歯固」です。天皇の長寿を願い、鏡餅や大根、瓜、押鮎、猪肉、鹿肉など、固いものを供することです。固いものを食べるのは、「歯」と「令(年齢)」を合体させると「齢」となることから、長寿を願うことにつながったようです。

鏡餅は平安時代には餅鏡といわれたようで、『源氏物語(初音の巻)』の中の一節、「歯固の祝ひして、餅鏡をさへ取り寄せ」が、鏡餅に関する最古の記述とされています。名前の由来は、神霊の宿る三種の神器(鏡・玉・剣)のうち鏡を表します。生命力を高める食物とされる米を搗き固め、丸く整形することで、神器の鏡にあやかったものです。

市井では家々の繁栄を願い、氏神の加護を願って、12月28日に飾るのを吉としました。末広がりの「八」にあやかったからです。餅の上に載せる「橙」は、家が代々続くことを願うと同時に、三種の神器の玉を、橙の前に置く「串柿」は剣を表わすとされています。

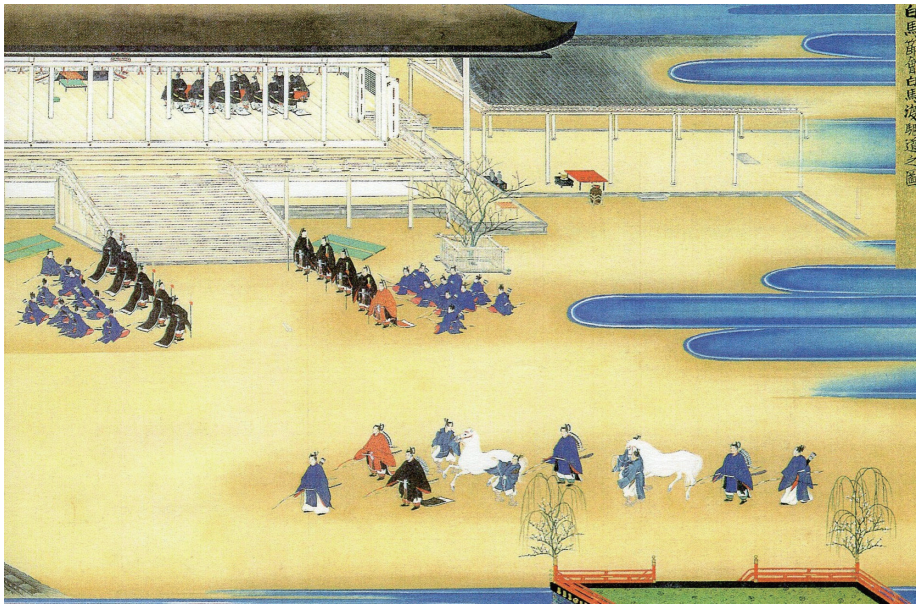


▲串柿を使う伝統的鏡餅

なお雑煮は神様からのお裾分けです。従って、餅は丸いのが普通でした。これが江戸を中心に四角くなるのは、引きずり餅(賃搗き餅)が現れた18世紀以降のようです。

大店などでは暮れの28日に総出で餅を搗き、お正月に皆で食べていました。しかし、九尺二間の長屋住まいには全く無縁でした。そんな長屋の人たちが、雑煮を食べるようになったのは、引きずり餅が現れ、大家が店子に雑煮用の餅を配るようになってからです。引きずり餅は、餅つき道具一式を持参し、注文のあった家の庭先や道端で餅を搗く生業及び餅のことです。12月26日ごろ(『東都歳事記』)から暮れまでの短期間だけの商いです。朝から晩まで次々に注文があったため、搗いた餅を丸める時間がありませんでした。そこで一度に大量の餅を作る方法として、大きく延ばして包丁で切り分けることを思いつきました。切り餅の誕生です。一方、店子も食べたことはなくても雑煮餅が丸いことは知っていました。そこで少しでも角を取るために焼くことを思いつきました。これが切り餅を焼く雑煮の始まりです。

２日には、「朝覲行幸」が行われました。天皇が年の初めに太上天皇(前の天皇＝上皇)及び皇太后の住まいである「仙洞御所」へ行幸し、年始のあいさつをすることです。



▲白馬節会（『公事録附図』樋口守保のうち恒例公事之図　宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

白馬節会

７日に行われたのが、「白馬節会」です。元は、邪気を祓うとされる青馬を天皇へ見せ、天皇からの返礼として宴(節会)が催されました。平安時代以降は青馬に換えて白馬が使われるようになりましたが、呼び方は「あおうま」のままです。民間で行われる「春駒」は、これをまねたものといわれています。

同じ７日に行われた行事が「供若菜」です。七種の節供または人日の節供ともいわれるように、７種の若菜を摘み、七草粥にして食しました。これは現在も広く行われています。

小正月

15日は、小正月(餅粥節供)として、天皇が小豆、大豆など七種の穀物を炊いた粥を食べました。旧暦(太陰太陽暦)では元旦は必ず新月になります。これを大正月というのに対して、望月(満月)が輝く15日を小正月と呼びます(現在は月の満ち欠けに関係なく１月15日のこと)。「餅粥の節会」の本来の意味は、「望月の日に食べる粥」でしたが、後には「餅を入れた粥」になりました。

同日に清涼殿東庭で行われたのが「左義長(三毬杖)」です。青竹を束ね立て、吉書や扇子、短冊などを結びつけて焼く儀式です。左義長は元々三毬杖と書いたように、毬杖(木槌)で木の玉を打つ遊びで、いわばゲートボールの元祖のようなものです。古くなった毬杖を焼いたのが「どんど焼き」の始まりのようです。現在の「どんど焼き」は古いお札や取り外した門松、注連飾り、書き初めを燃やしたりしますが、そのルーツがこの左義長です。

【参考資料】:『当時年中行事』国会図書館デジタルコレクション(写本)、『近世の朝廷と宗教』吉川弘文館、『後水尾天皇』中公文庫、『東都歳事記』国会図書館デジタルコレクション、『古記録にみる王朝儀礼』宮内庁三の丸尚蔵館編他

【取材】文：広報部会・光田憲雄

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和２年 10 月 18 日）

再訪　広重『名所江戸百景』周辺探訪
ーその１（王子周辺）ー

平成31年３月に終了した人気シリーズが、装いも新たに王子から再スタートです。前日からの雨も上がり、時折日も差す空の下、ＪＲ京浜東北線王子駅から出発しました。

飛鳥山から音無川へ

王子駅南口前の階段を上って行くと、飛鳥山公園の高台に出ます。飛鳥山は江戸時代から桜の名所として人気がありました。公園内の「飛鳥山碑」は桜を植樹した徳川吉宗の事績を顕彰したものですが、碑文が難解なため「読めない碑」としても有名でした。「飛鳥山北の眺望」絵には花見の様子と筑波山が描かれています。

山の反対側へ下りて都電荒川線に沿って北へ進むと、音無橋の近くで石神井川に出ます。この辺りは川の流れが緩やかなため、音無川とも呼ばれていました。現在では水路トンネルにより飛鳥山の地下を流れており、元の川跡は音無親水公園になっています。この付近からの眺めが「王子音無川堰堤　世俗大瀧ト唱」絵で、石堰や桜満開の飛鳥山が描かれています。

音無川に沿って上流へ

音無橋から川沿いの道を上流へ向かうと、「赤ちゃん寺」として有名な正受院があります。山門は中国風の造りで、上に鐘楼が載る珍しいものです。本堂前には北方探検家として知られる近藤重蔵の甲冑姿像が立っています。さらに進むと、窪地に「音無さくら緑地」があります。かつて蛇行していた川跡を遊歩道としたもので、奥の崖には浸食跡が見られます。

▲音無もみじ緑地公園

その先にあるのが金剛寺で、門前にはかつて寺域にあった松橋弁天（岩屋弁天）への道標が残されています。境内には宝永４年（1707）奉納の風神雷神像や、松橋弁天の参道に置かれていた七福神像があります。寺の先にある「音無もみじ緑地」も川の蛇行跡で、寺側の崖には松橋弁天の洞窟がありました。「王子瀧の川」絵はこの辺りを上流から眺めたもので、滝に打たれる人や王子権現への近道であった松橋などが描かれています。

対岸を下って王子権現へ

近くの滝野川橋から反対岸を下って行くと、途中から護岸壁が高くなり、対岸がほとんど見えなくなります。対岸の正受院裏の崖には不動の滝がありました。「王子不動之瀧」絵にはまるで大木のような大滝として描かれていますが、今では痕跡すらありません。音無橋まで戻って左折した左手辺りには、王子権現と王子稲荷の別当寺である金輪寺がありました。

▲「王子不動之瀧」絵

向かい側にあるのが王子権現（現王子神社）で、豊島氏が紀州熊野の若一王子を勧請して創建したといわれます。徳川家光により権現造りの社殿が造営されましたが、戦災で焼失して再建されています。境内の関神社は「髪の祖神」と呼ばれる蝉丸法師にちなむもので、髪関連の業界から信仰を集めており、毛髪を供養した「毛塚」も立っています。

▲王子稲荷

王子稲荷と狐火伝説

王子神社から北へ向かうと王子稲荷があります。「関東の稲荷総社」と称されて、江戸市民から絶大な人気を得ていました。当時の王子辺りは狐が多いことで知られており、境内には今でも狐穴が残されています。「王子稲荷の社」絵は社殿から東方向を眺めたもので、門前に並ぶ茶屋の屋根や白梅が描かれています。

ＪＲ線の「稲荷前ガード」をくぐった先の交差点付近にある王子２丁目バス停辺りには、かつて榎の大木があり、「装束榎」と呼ばれていました。言い伝えでは「大晦日の夜に関東一円の狐がここに集まり、命婦（高級女官）の装束に着替えて王子稲荷へ向かった。農民は榎の下で狐が発した狐火を数えて、翌年の豊凶を占った」とされています。「王子装束ゑの木　大晦日の狐火」絵はこの伝説に基づいて描かれています。榎は明治中期に枯れた後に幹が近所に移され、現在は後継ぎの榎が装束稲荷神社の御神木となっています。

狐火伝説に基づき、毎年大晦日から元日にかけて装束稲荷から王子稲荷まで練り歩く「王子狐の行列」が行われていますが、2020年は残念ながらコロナ禍の影響で中止になってしまいました。来年は無事に開催されることを願いつつ、終点王子駅へ向かいました。　　参加者77人。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

会員からの投稿

古文書初学者のつぶやき

中田光剛

東海道などの五街道を仲間と一緒に歩いた。旧街道を進むと、江戸時代に建てられた石碑などいろいろな石造物にたびたび出会う。それに書いてある文字を同行者がスラスラと読むのをうらやましく思い、古文書を習い始めた。

古文書などで村、町、宿場、寺、公家、武家、江戸幕府などの人々や組織の生の記録を読み、日本史で習った江戸時代とは全く異なる光景を発見し、興味がかきたてられ、ますます夢中になっている。

古文書の活字への直し方には長い伝統があり、学術論文を書く場合などでは従来の方法に従う必要があろうが、趣味で古文書を習う者には取っ付きにくい原因のひとつといえる。

この取っ付きにくさを減らすために、次のように分かりやすくしてはどうだろうか。

たとえば、助詞の「者、江、茂、与、而、之」は「は、へ、も、と、て、の」とし、カタカナの「ミ、ニ、ハ、ル」は「み、に、は、る」とし、合字の「ゟ」は「より」とし、必要な濁点は付け、付け加える読点は必要に応じて句点とすることなどである。このようにすれば、古文書を活字に直すのが簡単になり、その内容の理解も容易になり、また古文書学習を途中であきらめる人も少なくなるのではなかろうか。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月20日(火)「ひらい圓藏亭」にて活動を再開。中島達男さんの月番。今回は、「古典落語名人会」のテーマで、10代目柳家小三治の「三軒長屋」、5代目三遊亭圓楽の「死神」、古今亭志ん朝の「反魂香」のDVDを鑑賞。ほとんどの寄席が公演を中止している中、久しぶりに落語を堪能できた。参加者14人。

11月17日(火)「亀戸梅屋敷寄席」で円楽一門会の落語5席を鑑賞。月番は中村文男さん。出演の真打3人(三遊亭鳳志、萬橘、鳳楽)はそれぞれ「悋気の独楽」、「ろくろ首」、「寝床」を演じた。参加者12人。

◆藩史研究会

10月9日(金)辻井清吾さんの発表。高槻藩は、摂津国高槻地方(大阪府高槻市)に藩庁を置いた譜代の藩。元和元年(1615)、内藤信正が摂津尼崎から転封(4万石)。以降は土岐、松平、岡部、松平と、藩主が短期間に交代。慶安2年(1649)永井直清の入封(3万6千石)以降は、永井家が13代続いた。参加者10人。

10月16日(金)國定美津子さんの発表。山崎藩は天正18年(1590)8月、家康の関東入封に伴い譜代岡部長盛が上総、下総2国に1万2千石を賜って成立、同年11月に陣屋を下総国葛飾郡山崎に置いた。慶長14年(1609)長盛は2万石を加増され丹波国亀山に加増移封され、山崎藩は長盛1代で廃藩となった。今回は山崎藩の里見学会と称して、醤油の街野田市の郷土博物館、堤台城跡、岡部氏の菩提寺海福寺、山崎城跡、利根運河などを見学した。参加者6人。

11月13日(金)谷川よしひろさんの石見国津和野藩の発表。慶長6年、初代藩主坂崎直盛(出羽守)が3万石を領し入封、慶長20年大坂夏の陣で千姫を救出、その後千姫の扱いで幕府と対立、翌年切腹、断絶。元和4年亀井政矩(まさのり)が因幡国鹿野より入封、4万3千石に加増、幕末まで11代が統治。参加者11人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

10月、11月休会。

◆『江戸名所図会』輪読会

10月15日(木)佐土原一浩さんの担当。真土山の表記は名所図会のみ。古くから隅田川を一望する景勝地。待乳山聖天・本龍院は浅草寺の子院。日本堤は浅草から新吉原を通り箕輪に至る13町(1420m)ほどの土手である。江戸初期洪水に悩まされていた幕府は、諸侯に命じて真土山の土を運ばせ、水防対策用の日本堤を造らせた。明暦の大火後、新吉原移転に伴い、この土手道は、遊郭へのメインストリートとなる。今は遊郭はもちろんこの土手道もなくなり、当時の面影はない。参加者15人。

11月19日(木)川上由美子さんの担当。永代寺と富岡八幡宮(明治以前)の開基は寛永4年(1627)で、同じ長盛上人。明治以降は神仏分離令により富岡八幡宮は残ったが、永代寺は廃寺となり深川公園となった。江戸っ子の不動尊信仰は厚く、明治14年(1881)に深川不動尊が建立された。文化4年(1807)12年ぶりの祭礼再開の時、深川を目指す人々の重さで永代橋が壊れ1500人を超す死者が出たが、祭は挙行された。「永代と掛けたる橋は落ちにけり今日は祭礼明日は葬礼」大田南畝の狂歌。三十三間堂は寛永19年、弓師備後が浅草に京都の三十三間堂を模した仏堂を建立したのが始まり。名残は江東区立矢数小学校の校名のみ。洲崎弁財天社の本尊は弘法大師作の弁財天(綱吉生母桂昌院の守本尊)。海岸の佳景で有名。洲崎一帯は寛政3年(1791)の暴風の高潮で甚大な被害を受け、東西2つの波除碑をつなぐ海岸土手道(洲崎弁天参道)の内側での家作、居住を禁止した。参加者19人。

◆日本の大道芸伝承会

10月14日(水)絵解、地獄極楽やがまの油売りなど、それぞれがやりたい演目を決めるよう促した。玉すだ

れも形を整える練習をした。参加者３人。
11月11日(水)深川江戸資料館主催イベント「江戸の物売りと大道芸」が１年ぶりに開催(３月14日)されることが内定した。出演が決まると練習にも熱が入った。参加者３人。

◆江戸を語る会

10月31日(土)須賀靖さんの発表。『熙代勝覧』絵巻は1995年ドイツで発見され、ベルリン国立アジア美術館に所蔵されている。文化２年(1805)の江戸日本橋通り(当時の通町、現在の中央通り)を描いたもので作者は未だ不明だ。通りを行き交うのは買い物客、旅人、僧侶、棒手振り、武士など1671人の老若男女と犬20匹、馬13頭、牛４頭、猿１匹、鷹２羽で、通りには88軒の店屋が並びそれらの暖簾まで克明に描かれている。そこに描かれた人物や風景から想像される江戸を語り尽してくれた。参加者５人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

10月、11月休会。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ｂ班『文久三御用日記 上洛記』

将軍家茂の上洛に伴い、馬も上洛した。海路を予定していた家茂の上洛日程に合わせ、先行して１月29日に江戸城を出発し、21泊22日をかけ２月20日二条城に着いた。一行は、馬が19頭、馬医師・口取り・世話係など計103名の規模だった。通常は明六つに宿を出て、昼九つから八つ頃に次の宿に着いた。日本橋から京三条大橋まで、途中熱田神宮門前町の宮から桑名迄佐屋街道を経由したので陸路492kmとなり、一日平均約22kmを歩いたことになる。
家茂一行は結局陸路東海道を行くが、２月13日江戸を発ち22泊23日かけて、３月４日京都二条城に到着した。彼らは、府中(静岡市)で久能山東照宮詣でに一日費やしているので、江戸から京まで馬と同じルートで同じ日数をかけたということだ。
なお別行動となった御中間たちのうち、東海道組は12泊13日で上洛したので、一日約36kmを歩いたことになり、家茂一行より一日約14kmも多く歩いている。

友の会めも(開催日と人数)

令和２年10月～11月

◆役員会10月13日(火)14人。11月10日(火)15人。◆事業部会10月６日(火)17人。11月３日(火)16人。◆広報部会10月20日(火)９人。11月17日(火)10人。◆総務部会10月27日(火)14人。11月24日(火)休会。◆古文書講座 入門編：10月７日(水)午前34人・午後49人。11月11日(水)午前40人・午後45人。初級編：10月21日(水)午前44人・午後　40人。11月18日(水)午前41人・午後38人。中級編：10月17日(土)午前30人・午後20人。11月21日(土)午前25人・午後21人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト10月、11月在宅でメール交換にて活動。Ａ班11人。Ｂ班６人。

新 年 祝 辞

江戸東京博物館　館長　**藤森照信**

新しい年を皆様と迎えられましたこと、うれしく思っております。
昨年はほんとうにいろんなことがありました。当館にとってはオリンピックの1年延期の影響が大きかったと思います。
本年の特別展としては「北斎「冨嶽三十六景」と広重」、「大江戸の華―武家の儀礼と商家の祭―」、「縄文2021―東京に生きた縄文人―」を予定しており、準備も進んでおります。中でも、「縄文2021―東京に生きた縄文人―」は東京都埋蔵文化財センターとの共催であり、同館の持つ貴重な考古資料はじめ、当館の重要文化財や、茅野市の国宝の土偶なども両国の地に結集しますので、考古ファンならずともご期待ください。
本年こそ良き年になりますように。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　**林　正信**

明けましておめでとうございます。
友の会の皆様、昨年は「友の会」の活動にご支援、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。昨年を振り返ってみますと、世界中が、「新型コロナウイルス」の感染に覆われ、いまだに収束の気配が読めない状況です。
本年は延期されていた「東京2020オリンピック・パラリンピック大会」が昨年と同様の日程で、開催される予定です。博物館は大規模修繕工事により、来年の春ごろから長期の休館を控えていますが、本年も三部会は会員の皆様と共に、様々な難題を乗り越えて「友の会」事業を推進してまいります。
何卒、本年もよろしくお願い申し上げます。

第196回　江戸東京博物館友の会セミナー（令和2年10月24日）

立花宗茂―その迷いなき生涯

講師　立花　宗鑑（むねあき）さん（立花家17代当主、立花財団理事長）

15歳で戸次道雪の養子に

宗茂（むねしげ）は、九州の大名大友家の武将高橋紹運（じょううん）の長男として永禄10年(1567)に生まれました。同じ大友家の武将で大友家の流れをくみ、立花城の城督であった戸次道雪（べつきどうせつ）は息子には恵まれず、誾千代（ぎんちよ）と名付けられた男勝りの活発な一人娘のみでした。そのため同じ武将同士で親友であった紹運に、長男宗茂を養子にと何度も申し入れ、３歳下の誾千代と結婚して道雪の跡継ぎとなることを承諾させます。誾千代は７歳の時にすでに道雪から城督の地位を譲り受けていたので、道雪は自分では名乗らなかった由緒ある立花姓を宗茂に名乗らせ、立花城を任せます。高橋家は次男統増（むねます）に後を託し、統増は三池藩の立花として、後々まで宗茂を支えることになります。

戦国時代真っ只中の九州

その頃の九州は一大勢力であった大友家の勢力が衰退し始め、群雄割拠の戦国時代真っ只中でした。中でも薩摩の島津、肥前の竜造寺は豊後の大友にとって代わり、九州の覇権を握ろうと常に牽制し合っていました。天正６年(1578)大友が耳川の戦いで島津に敗れると、大友についていた武将たちが続々と大友から離反していきますが、道雪と紹運は大友から離れず、忠節を保ち大友家を支えていきます。しかし、天正12年に紹運と筑後地方の攻略に当たっていた道雪は竜造寺が守っていた柳川城を攻めますが、この堅城を道雪も攻めあぐね、長期の在陣がたたって翌年病没しました。享年73歳だったといわれています。

天正14年６月、九州平定を目指して島津の大軍５万が北上してきます。島津軍はまず統増が守る宝満城を落とし、統増と母親を人質とします。次いで高橋紹運が守る岩屋城に総攻撃をかけます。岩屋城を守るのはわずか700余名、宗茂は親の紹運に対し、立花城への退去を勧めました。しかし紹運は自分が岩屋城で徹底抗戦をすることにより宗茂が守る立花城への攻撃を遅らせ、秀吉の援軍を待つ決意を固めていました。島津軍からは、再三にわたり開城するよう要請がありますが、紹運は志を曲げず、奮闘の末、高橋紹運をはじめ全員が戦死しました。紹運は39歳という若さでした。秀吉からの援軍が近いという情報を得ていた宗茂は押し寄せる島津軍に対し、様々な情報戦と小競り合いを繰り返すことで大きな戦闘を避け、時間を稼いで秀吉からの援軍を待ちます。やがて毛利、小早川が率いる秀吉軍が博多湾に到着したことを知った島津軍は、立花城の包囲を解き撤退を始めます。

宗茂秀吉直轄の大名になる

この直後に、後に秀吉から“九州一の武将”と賞賛される行動を宗茂が取りました。島津勢に守られていた高鳥居城を奪回し、岩屋城を落とし、宝満城を攻め取り、人質だった弟統増と母親を解放したのでした。この素早さと一気に攻め入る豪胆さが秀吉をいたく感銘させたのでしょう。こうして、宗茂は秀吉から直轄大名に取り立てられ、大友家から独立、13万２千石の柳川藩の初代藩主となりました。弟の統増(直次)も三池藩１万８千石の初代藩主になっています。

それからの宗茂

それから５年後の文禄元年(1592)には、宗茂は秀吉の命により2500名を率いて朝鮮に出兵、各地で大活躍します。特に文禄２年の明の大軍を激戦の末撤退させた碧蹄館の戦い、慶長の役で大軍に包囲された蔚山（うるさん）城の加藤清正を救出したことは大きく、後年清正から心温まる扱いを受けることになります。

慶長５年(1600)の関ヶ原の戦いでは、秀吉に多大な恩義を感じていた宗茂は西軍側について出兵、最初に東軍に寝返った京極氏が守る大津城を攻め落としますが、そのために関ヶ原の戦いには間に合いませんでした。やむなく柳川に戻った宗茂を待ちかまえていたのは東軍の武将、鍋島、黒田、加藤の軍勢でした。戦いは鍋島軍とのみでしたが双方決死の戦いとなり、立花勢の数ある戦の中で家臣の戦死者の数が一番多い戦いとなりました。一方、宗茂の身を案ずる清正からは度重なる開城の説得があり、また家康からの「身上安堵の御朱印」が届いたこともあり、これ以上の戦いは無益と決意し、開城します。城を失った妻の誾千代と部下たちは清正が領地熊本に預かることとなりました。柳川藩は石田三成をとらえた田中吉政が支配することとなります。浪人となった宗茂は少数の部下と共に上方へ向かい、家康に許しを請いますが許されず、６年間の浪人生活を余儀なくされます。やがて、家康からの助言もあったと思いますが、秀忠に認められ、慶長11年奥州棚倉に１万石(後に３万石)の領地が与えられ大名としての地位を復活します。復活後は将軍秀忠、家光の２代にわたり御伽衆を務め、大坂冬の陣・夏の陣では秀忠に戦略面のアドバイスをするなど大変な信頼を得て、元和６年(1620)54歳で再び旧領の柳川藩に10万石の大名として戻されます。関ヶ原で改易され、その後復活した大名の中で旧領地に戻れたのは宗茂のみです。柳川に戻り最初に手掛けたのは、宗茂が浪人中に亡くなった誾千代を弔うお寺の建設でした。そして、加藤家に預けていた家臣を中心に新しい家臣団を再編し、領国支配を進めます。文武両道に通じ、部下に優しく、義を貫き、なによりも野心に無縁の人だった宗茂、亡くなったのはそれから22年後、享年75歳でした。

参加者114人。

【記録】文：広報部会・福島信一
写真：同・前田太門

第197回 江戸東京博物館友の会セミナー（令和2年11月15日）

廃仏毀釈とは何だったのか

講師　鵜飼　秀徳さん（作家　浄土宗僧侶）

廃仏毀釈とは何か

「廃仏」は仏を廃(破壊)し、「毀釈」は、釈迦の教えを壊(毀)すという意味です。慶応４年(1868)３月13日から、「神仏習合」になっていた神社と仏閣を切り分けるために、明治新政府は数回にわたって「神仏分離令」を出しました。天皇中心国家、神道国家を目指したため、仏教が邪魔になったのです。寺院の破壊が目的ではなかったのですが、地元為政者や若者らに拡大解釈されて過激な破壊活動に発展してしまったのです。寺院数は９万から半減して４万５千になったともいわれ、寺院、僧侶がゼロになってしまった地域もありました。廃仏毀釈が起きなければ我が国の仏像は現在の３倍の１千万程度は存在したと考えられます。

発端は比叡山の麓の日吉大社(ひえたいしゃ)でした。神社は寺院を守る守護神という位置づけから上下関係ができ、日吉大社は延暦寺に支配され、不満が鬱積していました。そこに神仏分離令が出て、日吉大社側は延暦寺に神殿の鍵の引き渡しを要求しましたが拒否されたため、寺の破壊行為が起きました。これをきっかけに、全国に廃仏毀釈が広まりました。

地域差がある廃仏毀釈

現在、日本全国ではやや神社が多いのですが、両者がほぼ同数存在します。神仏分離令が全国で実施されたからですが、廃仏毀釈はそうではありません。寺の数が少ないのは鹿児島県、宮崎県、高知県などですが、これらは廃仏毀釈が過激だった地域です。鹿児島県では仏教由来の国宝、重要文化財は存在しません。例外として、住職が大きな甕(かめ)に入れて納戸に隠し、難を逃れた仏像が、県の文化財になっているくらいです。鹿児島県で現存する寺は、廃仏毀釈が沈静化した明治９年(1876)以降に再興されたもので、鉄筋コンクリート造りの寺がほとんどです。

破壊活動が過激だった薩摩

近代国家の礎を築いたことで評価が高い11代藩主島津斉彬ですが、国学・神道的考え方から廃仏思想に傾いていきました。没収した梵鐘などの金属を大砲や小銃の鋳造に使ったというのです。斉彬は水戸藩による廃仏毀釈を見習いました。国学が盛んな水戸藩では、17世紀半ば、２代藩主光圀によって寺院整理が行われました。檀家制度の下、一村一寺という原則に基づいて、非合法、すなわち自堕落な寺を処分したのです。

薩摩で行われた廃仏毀釈は激烈でした。日置市の廃寺になった寺の門前に残る仁王像には頭部と右腕がありません。それでも残っていたのは珍しいほどです。ほとんどの石仏は粉々にされ跡形もなく、島津家の菩提寺さえも破壊されました。

現存する寺が全国で最も少ない宮崎県は、薩摩藩の影響が強かったため、破壊活動が過激に行われ、寺の再興もほとんどされませんでした。

各地の廃仏毀釈

松本藩は新政府軍か幕府軍のどちらに就くか迷って新政府軍に就くことに遅れを取りました。藩主戸田光則は負い目を感じ新政府に忠誠を示すために、廃仏毀釈に走りました。範を示そうと菩提寺の全久院に収められていた位牌まで川に投げ込ませるなど、徹底的に破壊を行ったのです。

伊勢神宮でさえ、江戸時代までは神宮寺という寺と一体でした。江戸時代の『伊勢参宮名所図会』に堂々たる大伽藍を持つ神宮寺が描かれています。神宮寺跡には多くの墓石が無残に転がっています。明治２年に明治天皇の伊勢神宮参拝が実施された際、日本を代表する神域に仏教施設があるのはまずいとして、多くの寺が破壊されたのです。

京都の八坂神社はもともと祇園社感神院という寺院でした。祇園は仏教由来の名前なので、八坂神社と改められましたが、「祇園さんの祇園祭」と今もその名で親しまれているのです。

東京都は、比較的廃仏毀釈が穏やかでしたが、それでも一部の人々は熱狂的だったと思われます。東京調布市仙川にある六地蔵には６体とも首を落とされた後修復した痕跡があります。

難を逃れた仏像

伊勢の神宮寺の塔頭、称往院の仏像に廃仏の厳命があり、照泉寺に逃がされたことが仏像の蓮華座の裏に記されています。たまたま行商に訪れていた知多半島の豪商が神宮寺の廃仏のことを聞いて嘆き、私財を投じて買い取り、檀家総代を務めていた海徳寺に船を使って避難させました。愛知県に寺が多いのは、廃仏毀釈がゆるやかで他地域からの廃仏の受け皿になっていたことも理由の一つです。

松本では大寺院がいくつも潰されました。廃仏は藩の力が及ばない天領に逃れましたが、避難先の西善寺の本堂と仏像のサイズが合わなかったため、やむをえず光背を外され、光背は別に保管されています。

廃仏毀釈の犠牲で小学校設立

明治５年新政府によって学制が発布されると、国家の近代化を図るために学校制度の整備が急がれました。廃寺になった土地や建物を学校に転用したのです。

松本の廃仏毀釈は過激でしたが、三つの寺の廃材を利用して開智学校が、東京では深大寺の塔頭寺院が廃寺にされ、調布市立深大寺小学校が創られました。私の母校、京都市立嵯峨小学校は天龍寺の塔頭でした。これらの校舎には唐破風など寺の痕跡が見られます。

レポーターからひとこと

今後神社参拝の折には、廃仏毀釈の痕跡を探してみるのも興味深いと思います。　　参加者166人。

【記録】文・写真：広報部会・大橋弘依

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和２年 11 月 28 日）

門前仲町から茅場町まで
―明治丸～掘割跡と「下り酒問屋」―

朝夕冷え込む頃の土曜日の午後、東京メトロ東西線門前仲町駅に集合して出発です。

明治丸から相生橋

清澄通りと永代通りの交差点から清澄通りを月島方面に向かって歩きました。越中島に入ると東京海洋大学が左手に見えてきます。大学の構

▲明治丸

内に明治丸記念館と明治丸の屋外展示があります。明治丸は、我が国に現存する唯一の鉄船(現在の船はすべて鋼船)で国の重要文化財です。また、近くに明治天皇聖蹟の碑がありました。

佃島周辺

江戸時代、隅田川河口には幕府が人足寄場として築島した石川島と、摂津国佃の漁夫が埋め立てて移住した佃島がありました。江戸時代中期には埋め立てが進み、この二つの島は掘割を隔てて接するようになっていました。佃の道の一角に「ここが道？」というような約1.2ｍで長さ20ｍ位の路地がありました。入り口の両脇に赤い幟があるところです。そこには平らな石に彫られた珍しい佃天台地蔵尊がありました。子の守護や長寿延命祈願で古くから親しまれ、お堂に食い込む形で育った銀杏の大木があります。地蔵尊の空間は狭く不思議な感じがしました。ここ

▲佃天台地蔵尊

を右に抜けると佃堀に架かる佃小橋があります。３年に１度開催される住吉神社例祭(佃祭)の幟に使用する柱が堀の中に埋められています。今年(令和３年)が開催の年に当たります。

中央大橋を渡り新川地区

中央大橋は隅田川に架かり、上は八重洲通りで中央区佃と新川を結びます。橋を渡り切った左側に霊岸島水位観測所があります。新川地区(霊岸島)は東を隅田川、北を日本橋川、南と西を亀島川と、四方を川に囲まれた島状の土地です。徳川家康が江戸入府以来、埋め立てにより造成されました。霊岸島の一等水準点(交無号)は、日本の標高算定の出発点となった場所です。明治初期の高さを基準として造られましたが、地震などにより明治24年(1891)の後、大正12年(1923)、平成23年と過去２回変動し現在に至っています。

▲霊岸島一等水準点

新川地区越前堀跡と新川周辺

現在では、地形や地図から越前堀の堀跡を確認するのは困難ですが、中央区新川１～２丁目地域には、越前福井藩松平家(徳川家康の次男秀康が家祖)の中屋敷を囲むようにコの字型に設置された堀がありました。中屋敷は隅田川に向かって、冠木門と左右に表長屋がありました。この堀の護岸は石積みで間知石(大小二つの面をもった四角錐状の石材)です。

江戸時代のこの地域は、武士、町人からなる大消費地に隣接していたことから、新川の両岸には、灘から海路で運ばれた「下り酒」を商う「下り酒問屋」がありました。酒問屋は、株仲間(同業者同士で結成された組合)で構成される十組問屋の中でも有力な組織となっていきました。天和３年(1683)ごろになると日本橋から新川界隈に立地が集中して繁栄していきます。しかし、明治５年株仲間が廃止され、酒問屋には新規参入者が現れ、下り酒問屋の独占販売が困難になります。

▲新川大神宮内奉献清酒菰樽

今も残る酒問屋に加島屋があります。大阪の豪商「大阪加島屋(広岡家)」の流れをくんでいます。大阪加島屋の第９代当主となった広岡久右衛門正秋の兄、広岡信五郎の妻はＮＨＫ朝の連続テレビ小説「あさが来た」のモデル、広岡浅子です。浅子は実業家として活躍し、現在の日本女子大学の設立発起人の１人にもなりました。

新川は亀島川から隅田川に合流する運河で、四つの橋が架かっていました。諸国から船で江戸へ運ばれる物資の陸揚げのため、万治３年(1660)に豪商の河村瑞賢が開削したといわれています。今は埋め立てられ昭和23年(1948)には完全に消滅しました。橋があった場所は、土地が太鼓状になっていて、当時に思いをはせると堀筋が目に浮かびタイムトリップした気持ちになりました。

日本橋川周辺

永代通りを渡って日本橋川沿いの北側を歩き、旧永代橋西詰跡、日本銀行発祥の地、そしてこぢんまりとした高尾稲荷神社を見て回りました。東京メトロ茅場町駅がゴール、5.2km の見学会は終了しました。

参加者73人。

【取材】文・写真：広報部会・元沢宏
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

えど東京一景

(25) ―二重橋―

日本で一番有名な橋です。正式には正門石橋（せいもんいしばし）。その奥にもう一つの橋があり、それが正門鉄橋（せいもんてつばし）。濠が深いので、江戸時代には橋桁を上下二重に組んで橋の上に橋を作っていたため二重橋と呼ばれていました。今では二重橋は二つを総称して用いられています。

明治以降、二重橋前には国家の喜びにつけ、悲しみにつけ国民がこぞって集まってきました。明治45年7月20日、宮内省が明治天皇の病状が深刻であることを発表すると、全国各地で平癒祈願が始まりました。二重橋前で一人の老婦人が夏の暑い最中にもかかわらず、こうもり傘を脇に下駄を脱ぎ、砂利の上に土下座をして、一心不乱に平癒を祈っている一枚の写真が新聞に掲載されました。それをきっかけに、二重橋前広場は祈願する群衆であふれかえったそうです。また終戦の日。「玉音放送」とともに、砂利の上に座ったまま涙する多くの若者や女性たちの姿を私たちは映像で繰り返し見てきました。

昭和23年から始まった新年や天皇誕生日の一般参賀には、毎年、全国各地から大勢の人々が皇居前に集まり、こぞって二重橋を渡り長和殿前に向かいます。

そして令和元年11月9日、皇居前広場で天皇陛下の即位を祝う「国民祭典」が開かれました。特設ステージを望む正門石橋に立たれた両陛下、アイドルグループ「嵐」の歌の終盤、雅子皇后がそっと涙をぬぐわれていたのはまだ私たちの記憶に新しいところです。

でも、私にとっての二重橋は、昭和32年、150万枚の大ヒットとなった「東京だョおっ母さん」です。♪ここがここが二重橋 記念の写真を 撮りましょうね♪　白黒テレビで見た愛らしい19歳の島倉千代子、コロコロとこぶしを利かせたその歌にじっと聴き入っていました。今では遠い時代の懐かしい思い出です。

【取材】文：広報部会・岡本　脩／イラスト：福島信一

江戸博クリップ

染付便器とトイレの歴史

事業企画課　展示事業係　学芸員　松井 かおる（まつい かおる）

ここ数年、「染付便器」が美術館などで展示され、話題となっています。これは、白地に藍色の染付で花鳥などの吉祥文様が描かれた大便器や小便器です。当館も角型大便器（港区三田魚籃寺寄贈）と向高（むこうだか）小便器を所蔵しており、2月16日まで常設展東京ゾーンで展示中です。

江戸時代、トイレは汲取り式で、大便器は長方形で前方に板状の金隠しが設置されていました。一方、小便器も木製の朝顔形または携帯用の向高が用いられていました。幕末ごろから瀬戸で、これらをそのままの形で陶器化し、染付を施した贅沢品の便器が作られ始め、高級料亭などの客用トイレで用いられました。

一方、明治維新後、都市部では西洋建築がさかんに建てられ、洋式の水洗トイレも輸入されました。木製便器より丈夫で汚れにくく、酸やアルカリにも強い衛生陶器製の便器を求める風潮が徐々に広まり、明治24年（1891）の濃尾震災復興をきっかけに、その需要が一気に高まりました。染付を施した高級便器も、料亭、富裕層邸宅の客用トイレなどで全国的に使われるようになりました。ただし、染付便器の取引は全体のわずか2％程度でした。その後、明治末期には高級便器の需要が青磁器製に移りました。染付便器の流行はわずか20年ほどでしたが、大切に使われて現代まで残ったものも多いようです。

一般用の便器は磁器による量産が研究され、明治24年、小判型で金隠しがお椀を半分に切ったような半月型の大便器が瀬戸で考案され、その後の和式便器のスタンダードとなりました。

今回の展示では、便器の変遷、水洗トイレの普及率などのパネルも掲示しているので、ぜひご覧ください。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㊷

［東叡山寛永寺］（前）

竹の台

今回は不忍池から続いて上野公園内に入ります。おなじみの場所ですが、美術館や博物館など何度も来ていながら山全体を歩いたことはありませんでした。上野の山すなわち寛永寺だった名所図会の頃をイメージしながら、10月の末に訪れました。

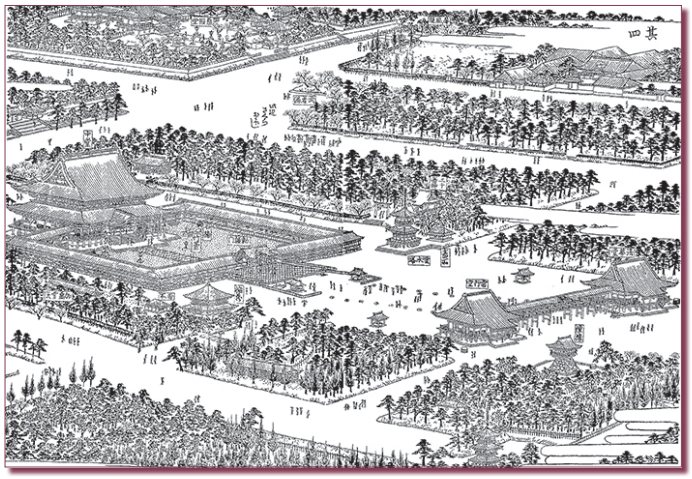
東叡山寛永寺

「円頓院と号す。人皇百九代　後水尾帝の御宇寛永年中比叡山延暦寺に比せられ、江城の鬼門を護るの霊区として慈眼大師草創有り」で始まる寛永寺の記述は全部で34頁にもわたり、そのうち20頁が挿絵という長編です。子院36坊、祠堂32宇、七堂伽藍を連ねた寺域は現在の上野公園のほぼ倍に当たる120万m²、最盛期の寺領は約11800石にも達しました。寛永寺はこの子院36坊の総称となります。記述には続いて「爾より已降、代々一品法親王座主として今天下第一の梵刹たり」とあるように、明暦元年(1655)には関東の宮門跡として後水尾天皇の第６皇子守澄法親王が江戸に下り、朝廷より輪王寺宮の称号が下賜されました。輪王寺宮は東叡山寛永寺の住職であり、東叡山御門主とも呼ばれて明治維新まで続きました。本坊である円頓院は寛永２年(1625)に完成し、幕府の祈祷寺として天台宗総支配という特権が与えられました。図会では、黒門から現在の東京国立博物館の場所にあった本坊までを連続して10頁の挿絵で描いています。壁泉から桜並木、噴水広場、東博へと通じる道は本坊への参道でした。

この参道には黒門から順に、仁王門、文殊楼(吉祥閣)、渡り廊下で繋がっていたため荷担堂とも呼ばれた法華堂と常行堂、根本中堂とその前に立つ雲水塔、転輪蔵などがあり、円頓院御本坊へと続いていました(挿絵参照)。

中堂

根本中堂は、天台宗では本尊を安置する重要なお堂です。本尊である薬師瑠璃光如来から中堂は瑠璃殿とも呼ばれ、方形にめぐらした回廊の正面の唐門は「瑠璃殿」と書かれた霊元法皇宸筆の額を掲げた勅額門でした。初代の中堂は、本坊などより遅れて元禄11年(1698)に、現在の噴水広場になっている竹の台辺りに完成しました。しかし、完成したばかりの中堂は勅額の届いた翌日９月６日に起きた大火で焼失してしまいます。中堂は直ちに再建され、宝永６年(1709)に竣工、上野戦争(慶応４年・1868)までその威容を誇っていました。現在の寛永寺本堂正面にかかる勅額「瑠璃殿」は、今はなき根本中堂の唯一の遺品となります。



▲長谷川雪旦　東叡山寛永寺　其四

竹の台とは、慈覚大師が唐の五台山から根分して持ち帰った竹を比叡山に移植し、さらにそれを寛永寺の根本中堂に植えたことから、この付近を竹の台と呼んだそうです。図会では「竹の臺」と表記していますが、現在でもこの付近を竹の台と呼ぶとは知りませんでした。

本坊

本坊とは門主の住む建物で、最初の本坊は寛永２年に、本格的な本坊は宝永６年に竣工し、輪王寺宮の住まいとなりました。東博の裏にある庭園は円頓院御本坊の名残で、その面影を今に伝える貴重な庭園です。各地から移築された茶室や九条館、応挙館、５代将軍綱吉が法隆寺に献納した五重塔などがあり、様々な樹木や花々を季節ごとに楽しめます。以前は桜の季節だけ開放されていたような気がしますが、今は展覧会帰りにふらっと寄って一休みするのにうってつけの場所です。

開山堂

ここまでは、挿絵の建造物を思い浮かべながら歩くイメージの世界でしたが、東博前の通りを右に少し行くと開山堂(両大師)です。とはいえ、この建物も平成５年に再建されたもので、かつて存在した開山堂ではありません。初建は天海僧正没後の翌正保元年(1644)で、その像を安置し祀るお堂として建立されました。慶安元年(1648)には朝廷より慈眼大師の諡号を受けたため「慈眼堂」とも称されました。後、寛永寺本坊内にあった慈恵堂から天海が崇拝していた慈恵大師の像を移して慈恵、慈眼の二人の大師をお祀りしたことから一般には「両大師」と呼ばれ、今に続いています。図会ではこの二人の大師の詳細な記述があり、挿絵には10月２日の天海忌日に行われる法華八講と、月ごとの晦日に両大師の御影が36の子院を巡回する両大師遷座の模様を描いています。門前の右側にある「両大師」の金札は、その目印にしたものです。

上野戦争で輪王寺宮の称号は途絶えましたが、明治16年(1883)に輪王寺の名称が復活し、両大師の正式名称になりました。壊滅した寛永寺旧本坊で、唯一焼け残ったその旧表門がしばらくは博物館の正門として使用されていましたが、今は両大師右隣に移築されています。黒塗りの堂々とした切妻造り本瓦葺、潜門付きの薬医門で、砲弾の跡が生々しく、よくぞ焼けずに持ちこたえたと感慨が湧きます。境内左端の石塀の一角は歴代の輪王寺宮の墓所ですが、中には入れず、簡素な「輪王寺宮墓」の標石が立つのみです。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

新型コロナウイルス感染防止にご協力を

友の会の催事再開では、感染防止策のために何かとご不便をおかけしています。参加者のご協力で8月からのセミナー、9月からの古文書講座、10月からの見学会を無事に開催することができました。これは参加会員の方々のご協力によるものと感謝申し上げます。しかし感染者拡大傾向にある現在、引き続き新型コロナ感染防止のために催事申込および参加時には下記のご協力をよろしくお願い致します。なお、11月末から新型コロナ感染者が急増しており、館のガイドライン改訂で募集人員見直しもあり得ることをご承知願います。

1．申込みはがきに必ず会員番号、連絡先電話番号も記入、同伴者がある時は氏名、電話番号、住所をご記入下さい。
2．次の①～④に該当する場合は来場・参加はご遠慮下さい。
①発熱があり検温の結果、37.5℃以上　②咳・咽頭痛などの症状がある　③新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある　④過去2週間以内に入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国・地域への訪問履歴及び当該在住者との濃厚接触がある
3．来場時(見学会も同様)以下の①～⑥を守って下さい。
①入館時に検温を受け、マスクを着用し、手指を消毒する、見学会参加時には自宅で体温チェックし、マスクを着用する　②受講票切り取り線下部のチェック表に記入、提出する　③会場内及び見学時の会話は極力控える　④咳エチケットを守る　⑤入場前・トイレ待機・終了後退出などの際は社会的距離を保つ　⑥会場内や見学時に体調不良となった場合、速やかにスタッフに伝える

事業部会長　待場　浩

古文書講座

◆１月から今年度最終の第３期を開講

申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内します。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：１／13(水)、２／３(水)、３／３(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：１／20(水)、２／17(水)、３／17(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(徳川林政史研究所非常勤研究員)
- 開催日：１／23(土)、２／20(土)、３／27(土)

- 時間：各講座とも
  午前は10時30分～12時30分
  午後は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸東京博物館・１階会議室
- 参加費：各講座とも全３回2,000円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会セミナー

第 200 回「徳川家康はなぜ三浦按針を外交顧問としたのか」

講師　鈴木かほるさん(歴史研究家)

◆通説では、三浦按針は英蘭貿易のために外交顧問として重用されたことになっているが、実はそうではない。それは旧教国スペインとの貿易のためである。浦賀湊にスペイン船招致を画策する家康が、なぜ、その敵国のプロテスタントの三浦按針を顧問としたのか。また、彼の来日から母国イギリスとの国交が樹立されるまでの13年間、彼は何をしていたか。浦賀貿易にどう関わり、どう家康と関わったか。禁教により平戸に移住するまでをお話しいただきます。

◆講師略歴：すずき・かほる
神奈川県在住。国学院大学文学部史学科卒。中世史専攻。三浦一族研究会特別研究員。元ＮＨＫ文化センター講師。現在、国史学会、鎌倉遺文研究会、日本海事史学会所属。ＮＨＫ・Ｅテレ、民放テレビなどに出演、講演など多数。著書は、『徳川家康のスペイン外交』、『相模三浦一族と、その周辺史』、『史料が語る向井水軍とその周辺』などの他、論文多数。平成28年瑞宝単光章叙勲。

- 開催日時：２月14日(日)　14時～15時30分
- 申込締切：１月28日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

見学会

浮世絵と古地図で巡る江戸 ～傳通院とその周辺を巡る～

◆徳川家の女性たちが眠る別名「女寺」といわれる傳通院を中心にその周辺を巡ります。家康生母於大の方、孫の千姫、家康の側室、家光の正室孝子の方などの生き様に思いをはせます。また、傳通院にある清河八郎、佐藤春夫、柴田錬三郎などの墓所も巡ります。傳通院から、歌川広景の浮世絵「小石川にしとみ坂の図」、葛飾北斎冨嶽三十六景「礫川雪の旦」に描かれている「北の牛天神」を通り、解散場所の飯田橋駅までの約３時間のコースです。

- 開催日：３月14日(日)　小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時15分　受付終了：12時45分(時間厳守)
- 集合場所：都営地下鉄三田線「春日」駅Ａ３地上出口
  (南北線・丸ノ内線「後楽園」駅、大江戸線「春日」駅地下連絡)
- 申込締切：２月25日(木)必着
- 定員：80人　同伴者可(申込はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い釣銭なし)

【企画担当責任者】中村明義・小西幸男(事業部会)

投稿原稿募集！

えど友 広小路 会員交流欄

コロナ騒動で翻弄された2020年も終わり、2021年の年明けはどのように迎えられたでしょうか。『えど友』が皆さんのお手元に届く頃は第３波が収束しているか、まだ続いているのか、いずれにしろまだまだ心もとない日々の終わりは見えません。

友の会の活動もだいぶ元に戻りつつありますが、参加を躊躇されている方も多いと思います。外出を控えている方も多いでしょう。

在宅時間のひととき、投稿欄へ日々の気持ちを綴ってみませんか？　文字数は 1000 字程度で、コロナ下での「新しい生活スタイル」の日常や、友の会の催事に参加しての感想などなんでも結構です。

原稿は事務局に送るか、広報部会のメールアドレスに添付して送っていただくこともできます（送り先は下部参照）。

たくさんのご応募をお待ちしています。なお、応募の際、ペンネームなどの使用はご遠慮いただいておりますのでご了承下さい。

催事のお申込方法

◆**普通はがき（63 円）**に、
①催事名（略名可）・開催日
②会員番号**（必須）**
③氏名（同伴者連記）
④電話番号（同伴者）、住所（見学会同伴者）
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。

◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網１−４−１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録、切り取り線下部のチェック表を提出して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日（11 時〜12 時、13 時〜16 時）**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会員優待のお知らせ

●特別展「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵 古代エジプト展　天地創造の神話」

会　期：11月21日（土）〜４月４日（日）
会　員：一般900円、65歳以上720円、大・専門生720円、高・中・小学生450円
同伴者：一般1,440円、65歳以上1,150円、大・専門生1,150円、高・中・小学生720円
●（注）割引を受けられる同伴者は１人だけです。

企画展のご案内

●和宮　江戸へ―ふれた品物　みた世界―

会　期：１月２日（土）〜２月23日（火・祝）
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●市民からのおくりもの2020（仮）

会　期：３月９日（火）〜５月９日（日）
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

1 月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

2 月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28						

会報＜えど友＞第 118 号
令和３年１月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林　正信（会長）　編集長：中村貞子
岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、横島利明、福田 徹、元沢 宏
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１　電話 03-3626-9910